



^ 13
2898
5





近世新話 雲晴間雙王傳第一集卷之五

東藩 宮田南北編次



別墅小誘ふく別所勅使と這ま
笛声媒とて玉花赤繩と結ぶ

其時別所長則朝臣へ頭と擡り宜ふやう。こゝぞんどもうさうさう
御詔の趣き恐ろしくまうりひあり。這回當国天神山より得と
るさうらけ壁といふへいひもせみれたらひあつた。元是は
蛇の頭より出くる東西うき得へ至薄の掌ふるを給はる。其
く恐ろあきふあし。然るは是と辞まうさへ其罪違勅に
かへ慮の懺感と顧ず献りいべ。と云は御勅使治長卿打り

又玉傳卷之五

長門屋題
治生長門屋題
山具氏家
長取銀錢
奸り
白く
参之二年七月長江下看
松島舟内



笑く宜ふやう。その国司の遠慮理あるふ似れど。都く世上の宝
とするの宝刀利劍の其外は皆是人力の及び物なり。皇朝
三種の神器異朝の傳国の玉璽あは。天地自然の成と。予が演
ましても知らず。夏あり。知らずや古楚國の下和と云る人ありて
璞と楚王に献せり。其壁終に天下のり。秦漢魏晉の時迄もこと
傳國の玉璽と称す。異朝代々皇の御位祿の宝とせり。徳る古例の
あつたは。早々壁と帝朝に捧げ。皇國の神器と數聽され。當家
の譽洪大あり。這義と感查あきよ。と。演つ笑く顔面ら。
操和温順比傳もあ。ぬ玉と欺く容貌へま。と十六夜のう。う。
姿に諸人首と擡げ。初首く見申の勅使の美艶。歳記ま。と不季ら。

上、東帯冠りもあ。やう。出立ま。守く優う。と錦小花とそ。
う。目と驚さをう。其時。も豫。う。長則朝臣の
命と受次の間。控へ。名古十郎忠邦錦の帛。那名玉と包
。ま。に白木あ。三室。銘り。最。持出。勅使の御前。
陶置つ。遙。下。つ。抵頭。ま。長則朝臣宜。や。勅命。應。名玉
と。敵。見。供。へ。奉。楚。と。改。御。入。納。あ。と。給。へ。と。長則朝臣の言。勅使の
点頭。後。邊。小。控。へ。小童。小。笏。と。持。せ。將。椅子。と。放。れ。口。白。紙
と。嚙。あ。ぐ。帛。と。開。く。見。そ。あ。す。に。現。や。名。小。あ。名。玉。あ。て。光。り
四下。小。散。徹。し。す。ら。せ。宮。殿。の。形。玲。瓏。と。眼。と。驚。ま。希。代。乃。珠
。治。長。卿。の。掌。取。あ。げ。う。奇。成。哉。這。名。玉。異。朝。の。夜。光。の。知。ら

又玉傳卷之三

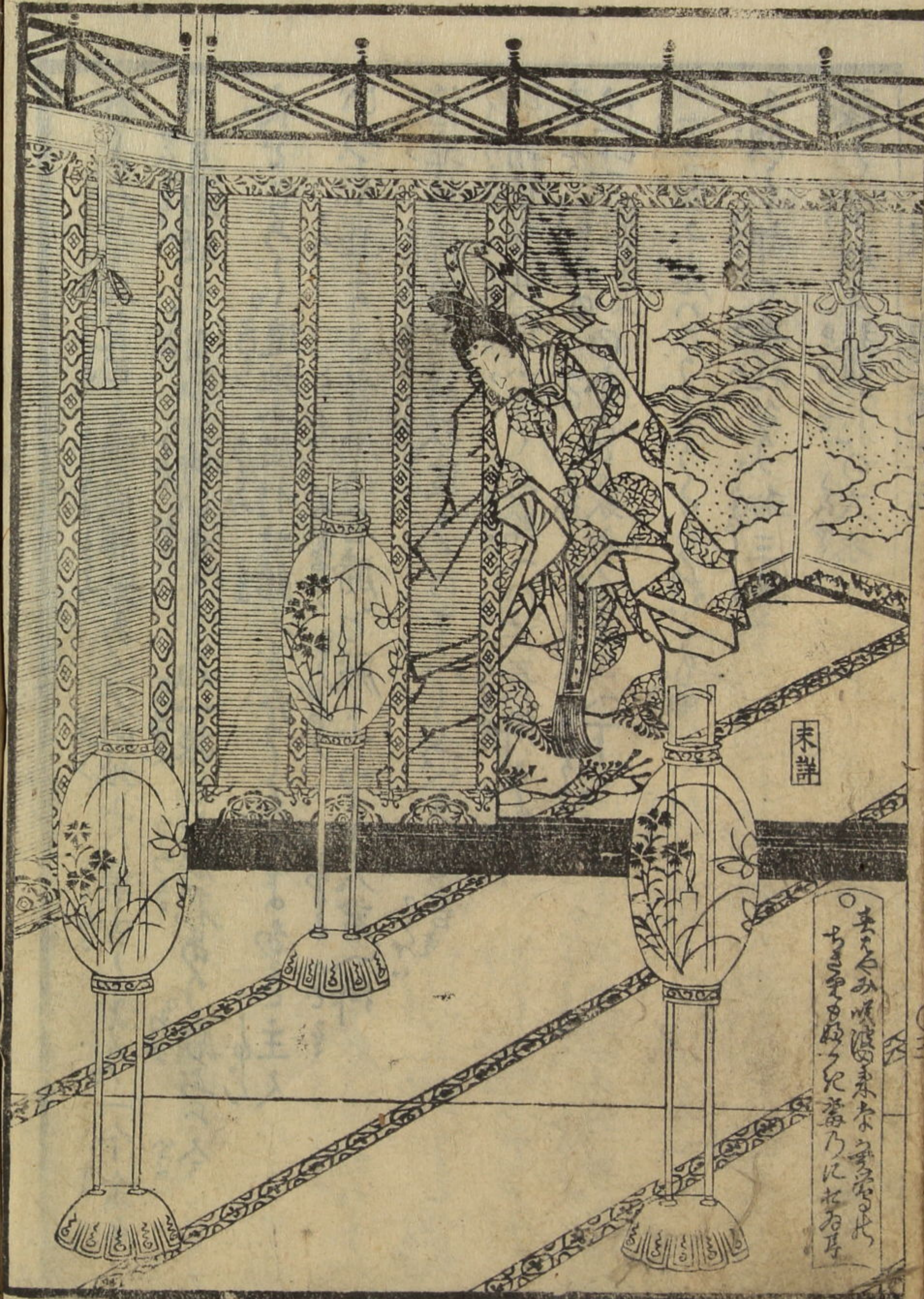
水滸傳
東道の
主と

ねど昔一神功皇后龍神の捧くる。夕滿朝于此双玉くうく。
よも此上越べうす。是ど皇國の玉璽之皇帝觀覽はくまの
感悦あらん疑ひなく。と押戴きつ帛小包く豫く准構は
錦囊へ納く御首筋懸給へ蒲上大學すく出御使ふ
都より。そみく下向はくませし。無碍をかへらせ給らん。最
本意なすくもさく侍も。今宵ハ此城中く。饗應し奉
らんと思へども。當城中ハ元來して。雲客歌君不見せ奉るべき。
東西くくもさむくねバ今日ハ拙者が東道の主人とあり
て御使さると。この佳境ハ誘ます。田舎の奥と添奉らん原
是の佳境とく豫ても噂聞り。あられくや當城の乾り

あらく。比良田と喚做勝地あり。此地ハ最古くより。一千余年
の星霜経し。世も侍いさくぬ。一根の杜鵑花あり。願ふ今より
夜とく。這地ハ遊行せ給う。なす。あよあき主人のようく
びく。且ま。當地の名勝と殿上く大君へ御奏達給う。
播地ハ僥倖何緯致遠く人のさく。ふべき。と言辞巧ハ演々長
則朝臣も共侶ふす。め給へ。治長卿らちわく笑く宜ふや。予ハ
注上。帝とく。の命と蒙り。當國へ下向せ。最太切の勅使を
ハ容易ハ應はく。く。固く辞ハ國守ハ厚意と破損
ふ似く却て無礼あり。和王達を奏ふ任し。今宵ハ比良田ハ遊べ
豫く閑ぬ。杜鵑花の大木。都城ハ土産ハ一覽し。帰ら。遺憾



飛鳥



未詳

夫之公以順渡の来本之書を記す
古之書に記すに此の如し

絶ふ似これ直ふ是より参入一と辞ふ国守長則朝臣と首を
 まらせ開宅の入り。皆一同小頭と抵御成と喚われ疾疾前
 へ昇出と輿轎やと戸を開せ兼せ給へ警畢の声ありしも
 昇荷ひ比良田とさして急ぐせ跡小繞て長則朝臣烏帽子大紋立
 波小出立馬上あがり送り給へ。開外家の臣良徒ども次第と守り
 行烈とて。綺羅と飭りて従ひ行其行粧優美ふして武威ますく
 頭と入り。抑比良田の別荘と謂ひ其古昔赤松入道圓心源則朝
 朝臣建武曆應の戦功ふよつ。播磨備前美作の三ヶ国の守護職
 と賜ひし時。這地ふ杜鵑花の大木ありしと。築山の中ふ取閑印と
 一の別墅と嘗て風雅か亭と所々小設け。乾ふありと梵音亭と云

坤ふあると鴻禧觀と喚做し。唐土紹兵府の鴻禧觀ふ郊ひ梁り天
 井ふ浙江の錦皮と張り。朱塗の障子黄金の柱。一層ふして上ある
 間と霄錦洞と喚做し。下ある間と廬山洞と号し。巽ある
 と両龍殿と号し。殿内の彫より。襖壁小至る迄皆是龍它と曳る。
 這園園小杜鵑花あり。這回勅使を入奉る。此殿と定らる。又
 良ふ万壽亭あり。築山四方小環り廻り。泉水青く碧をかりて
 其形勢莊麗なる。栄と究むと云々。然るふ其後嘉吉元
 年六月の頃。將軍足利義教公の令命ふよつ。赤松満祐入道
 性具則祐が孫律師が時備前作左の二ヶ国を其一族切つ。赤松伊豆
 守貞村小分よんとありし。満祐が子の彦次郎教康。密に

又玉傳秘録

五

関く此由と父満祐ふ語り々々満祐大不足と恨る。酒宴と設く
 義教公と其弟宅小請侍。彦次郎康教と左馬之介則康と小
 謀と示してとき忽地足利義教公と討奉り。首頭と提げ一族引つ
 と京都とともあまて本国ある播磨へ遣下り。白旗城小構籠り謀
 及の色と願ひし。時小義教四十八歳普廣院善山と号す。其時
 公方家の諸侯達ち。細川讚岐守持常。赤松伊豆守貞村。武田
 大膳大夫信賢們と大手の大将と定めつ。山名右衛門督持豊
 同修理大夫教清。同相摸守教之們と搦手の將と定め。播磨小
 発向し。教度合戦ふ及びし。赤松終小討負く。一族良徒自又
 伏し。家と破滅ふ及びし。満祐時小六十一歳この是其年終

九月満祐の首の都其後將軍義勝公義教の子より。抑下知あつ
 ぐ播磨國の山名持豊小賜りて美作と教清領し。備前の教之小賜り
 たり。時小持豊剃髪し。山名宗全と喚做せり。宗全播磨と得て
 たり。此比良田ある別墅ふおどく小行通ふ。旗び所とんなり
 たり。其後赤松政則の妻より。京都大に騷動し。細川勝元。山名宗全
 威と争ふ。諸國の大名附順ひ洛中ふあひ戦ふ。こと應仁の乱とゆ
 て。中古の大乱といふなり。其後文明五年三月十九日。山名宗全京
 師小平年細川右京大夫勝元も同き五月十一日。京師小平
 せり年龍寺と号す。訖も其後赤松九京大夫政則朝臣終小管領の位
 小昇り。從三位小任叙せしれ。再播磨備前美作の三ヶ國を賜り終り

又三傳新編

武門の花開け、栄花の春不遇ふ夏より也。家の臣良従ふ至る追喜ば
 さるりあがりたり。其時政則の従弟ある伊豫守義雅始り比良田
 の別墅と賜り。五ヶ所の莊園と。兄政則より分知せし。義雅は是
 より比良田に移住して別墅と旁像り姓と改む。別所と号を巧と
 累必賞と精ぐ。終小東播八郡と領し。上の丸地と遷す。是首ふ一ツの
 錦城と造り。是と二本の金ヶ城と称す。本家政則より附家臣と
 浦上則宗が一族兵庫連貞と三木へ遣す。連貞も姓と改む。浦
 上小艸冠と増し。浦上兵庫と喚做たり。然るも明應四年四月廿五
 日赤松政則四十二歳に病逝せし。性善院と追号せり。家臣們
 忿入る衰と發し。後商量し。赤松藏人元政の子息才松九と冊

浦上
兵庫連貞
大學生
形

立く。三ヶ国の大守。赤松上總今政村と称す。執事浦上美作守則宗
 権威と振る。其威主と覆ひたり。赤松家武威忽地衰へ今ハ三木の
 別所不及昔の赤松家に変りたり。別所ハまを繁栄し。さな
 ら正統のころ見へ義雅既逝去せし。其子長村家督と統ぎ。世
 と治吏僅ふ三年。其子長則に世と譲り。適世の後逝去せり。ころ是
 天文二年の夏。西曾古が娘異姫を産む。年の夏ありき。今
 別所長則朝臣へ民と憐む。明君あり。奇麗壯觀の国の費民の
 嘆き。世小無益れものなり。比良田小遊に給り。最早も。經
 営し。巧と盡す。其儘に置し。這般勅使下向す
 つも。毎日より浦上小傘。經營となす。り。這頃既ふ

天正七年
 物車田
 合戦
 此所
 火
 證
 鳥
 と
 つり

功と異く。壯觀とくくつ勝りたり。這時勅使の輿へ正門より出陣
 あつて高町と過く西の方大村町より此良田に至る路次九十五里
 警固辻堅めの武士六十四人、神供奉の面々の長則朝臣とくくつめり
 皆馬上より装束に唐織浮織蜀江の錦、吳郡の綾、都蘿美と盡くつれ
 へ遠近の男女貴賤、技舗と構へ仮屋と打く集り、見る度市に似たり、輿
 既不比良田に至ると、治長卿輿より下り、鴻禧觀の廬山洞へ入給へば
 長則朝臣も著座し、大酒の宴を開き、山海の珍味種々の肴菓
 所狭まぐ置たり。坊々庭の松が枝ふまぐ、閑とめぬ寒暄の
 初音をくつ。秋木立池の小細波岸に寄り、魚ももの面白く打戯
 せく己が氣はふあてるうけくありさま。今日の日も短くで

ゆくと一々の輿と増く。豫く准構やあつたり。依樂の華ふ命く
 頓く能曲と始り。第一番ふ老松、第二番ふ東北、第三番ふ玉音、第四番ふ
 定家、第五番ふ熊坂、是と今日の畢りとす、別所長則朝臣へ元より曲ふ秀
 給へば、自ら熊坂と舞たり、諸人皆感動と。能止後、後まぐ宴は開
 き、勅使と饗應くれば、既ふ其日も暮たり。浦上大學誘ふて、兩
 龍殿へ入奉り、這里の園圃の名を、杜鵑花の大木ありたり、
 治長卿の御喜又、
 弦の削り如き月蔭、正法寺の山より出く、梢よりあやをのり、
 あよのふめく、此良夜杜鵑花の零く、吹拂ふ風ふ散て、まらびは浴
 へさめり、玉と降ると似く、詠ふ飽ぬ、絶景佳境、漢の武帝の耳泉殿

又主傳卷之...

の秋のあそび。唐の明皇驪山宮の月夜半あど思ひ出され夜も
 闌ふおとびくせむ。治長卿の童独り。閨ふ入人と思ひ給へど。養老水
 小堪うみく。霎時かうるふあそんとして。陞迹くど出給へば。二間ぐら
 りも隔くうらん最。ある笛の音は。恨がどく哭がどく。調や
 さしく吹すは。是や古の敦盛ふあそぶ。又是何人。秋あそぶ
 得人。噫艶くやの竹は音と心耳とす。思わざ知らず。居間と
 放きく立寄つ垂。簾のちりくと。玲瓏して見よ。豈知らんや。
 年終頃二八ぐらり。身は紫は振袖。龍の摸様の縫泊せ。羽
 奈花色の勝と附見。知らむと横笛と吹。姿は容貌美や。玉も欺く。世は侍を兒美少年。こゝ古乃

敦盛が亡霊ある欲と愕きあぐら。治長卿の後ふ立。今ハくくは。不
 ろるべき秋の夜と。あよとや君のあそびの。詠バ忽ち那美少年
 へらち驚きて。笛と止後邊と見入り。寛尔と笑。中納言さる何
 時の間ふ。今日へ思はと長則主の饗應。不預り侍。元來酒量
 かつと吾濟醒りや。せんと這所へ。出や。月の詠ふあそぶ。あつね情
 一一言の君が春や。言は葉と。かけ給ひよ。今の歌ハ。二世も
 契らん實の心。耻くあぐら。打開く。云ま。思ふ吾濟の胸の
 解く云り。語りり。互に告る心の底と。云バ此身ハ。男子
 小あそぶ。御身が艶ある。姿あそぶ。真と證。譚人。這目先
 考治長。主帝の勅と。けり。下向の准構あり。處が猛可。不塔

又五律卷之五

の病発りて思ふに任せる躬の上と託給ふ音濟に見る。女はに
 出し夏あつ。這回の勅使と辞固給り。帝の歡應もろろりつ
 まじ。吾の元來女流あはれども同く皇君の祿を喰。恩小二ハなき
 ぞ。願ふ先考の代わ。播磨へ下向かし待らん。覺束あ
 思ふ。知らぬ。殿上の交り大畧は是と知り。や。誤ちひん
 や。這義とらけひき給はずやと頻ふ。むぞ求るね。先考ハ左右を
 くゆらさざらん。二とび三とびんくも。やうくふらけ
 ひきて緯らま。と指圖し。必む誤辱なきやうと仰せうけ
 く先考の名と假り。比良石中納言治長と稱して這地へ下白
 あし。首屋うく玉得く。い。あるゆ。和主と一目見し。

心迷ひ。先考め誠忽地々忘れ。今ま。包。たる。誰と
 頭。這躬の上。大夏と云も金輪際御身不深く悪の字と譯けも解
 ともや。と。御身の。い。ある人。悪人ある。知らねども。
 焦らちあけ。姫御女。と。つ。き。も。え。り。見。む。恍。惚。と。病。と。ひ
 這首。情の。僚。養。願。奉。る。や。真。と。あ。る。守。麗。人。の。情。願。行。龍。ハ。心。の。内。一。回
 ハ。訝。り。一。回。ハ。喜。び。ひ。い。ろ。情。思。ふ。や。吾。と。り。や。より。此。人。ハ。世。に。傳。り。又。あ。る
 ま。き。美。男。子。と。こ。を。思。ひ。し。不。豈。そ。う。ん。や。公。家。の。息。女。高。野。へ。行
 ぬ。大。上。品。と。ん。神。あ。る。ぬ。身。の。今。迄。ハ。羽。の。毛。お。わ。ど。も。知。ら。ざ。り。し。小。意
 外。出。し。千。喜。万。悦。娛。し。を。限。奈。麻。与。美。の。甲。斐。の。白。岑。に。燃。起。情
 の。猛。人。樂。々。自。在。王。得。る。の。牧。天。津。あ。る。し。女。か。と。人。の。弥。増。る。美。人。の。初

源氏物語

一撃誰逃
 忽迅雷風
 前無跡兩蜻
 蜓何未片玉人
 收手千丈光冷
 萬落星



及法書傳卷之三

4233

紅印

闇夜闘戦双玉全現

柙の
 九を
 持の
 ころ
 ね

高十郎



高十郎

及法書傳卷之三

生置膳食ふとふ。十三四分の造化と心の樂しき比類あつねら満面
み笑とふくも。こゝ有がさき姫さぬの弘誓は船に乗んとい嬉し
限りはたつれども。君元より雲は上人吾済の僅う五計米子馬前
の塵と拂ふ匹夫配偶いとも恐しと固辞舟も眼を以て情とよせ
つる粹男は艶しきつゆくま守花の姿は姫のまもり見とれこゝ
下さすに似げもあき悪ふ雲坵の有べきや。十六年の其あひど穢
しもやぬ身と穢し。ちぎる人ところと思ふ瀬のたど一たび
夏あらんや難固うかといへばふ岳破融を真誠の膝うや直と
打りつれ勢ひ篋し玉鐔の素と合を肌と肌巫山の夢秋の夜
と魚とあり水とあり。つるあつ夏くやあつたりつる散りつる言を

閑へる

第十回

情々相挑んで。雙玉全く現む
扁舟江に浮んで。廉入突く危し

夜もたややく。更行く草葉ふす。虫の音も最ののまどさ
折るそあき。姿似氣あき女は勅使と。共侶ふ卧つる蚊倉行
龍とつくと起く。四下と見廻し。寢息と考へひとり笑。嚙み痛
上へ遮りつる。武具う取り疾早く。身を堅らつて出立し。船は
小貝足のうへ。熊の皮は。大袖と着し。袖うへむしと紫糸の総と附足
み五枚累の草鞋と踏。黄銅菴め。一刀横へ。双はあれ。雄龍の名刀あるこ
云でも知る。美々しき粧ひ。女勅使の腰をささぐ。やあつる。拿出と

那名玉推りてさきへ懐へ収く抜足さし足に遣化精妙と出清水
 跡の濁欵意の底は深き謀に乗る。船舟をりや帆をけ船水道
 の方ふ忍ひ行ふり。有恚るるは那女勅使の目と覺しつ四下と見
 まや。腰とさきさるふころのつふ悲しや玉の卑くも失て船と住し
 くる美少年の落さへ見へどあつるをいはいつらう。さては那少年の
 元より賊少ありさる。とん知らずしてあさましや。その艶色ふ
 迷されく。肌船ゆるせしそがひまふ玉と鈍くも棄せし欵工、口惜て
 腹立や。伎倆ふ較計く當城へ入込し甲斐もあふ又名玉と棄拿し
 犬のひとりて鷹の餌とありしんつら悲しけれ。今の恚へし
 居るるに兼て準備やしるる人装束のあつる腹甲しも太刀

横へく立るる初ふらう。勇婦の形靴不曲者と見へさうらう。
 恚る所へ名古十郎。駈兵卅餘名と従へ兩龍殿不直とゆふ。書院乃
 方より乱入を御説さしと呼け呼掛。手ふ掌子鉄手摘繩おつる道
 さしもの取圍る。登時勅使へ上座不勇威と震るるをさしとわらふ。
 れ徐達不礼の勅使に向くをさしするぞ。さうと馬まは十郎呵々と
 あさ笑ひ大胆の女盜賊。這期ふ及ん。何と欵陳さる。汝が素性既ふ知る。
 本躰頭へ脛と静く。訛の頭口慥不聞ね。主人別所長則朝臣。今日這館
 より還却ましく。いまと奥へも通り給へぬ所へ忽地京都より。再勅
 使の光觸來り。當月七日。勅使這地へ御下向へ準備とありて迎へ給へと。
 最きひしき文躰へ長則朝臣の大き訝り。勅使の既ふ御下向あつる玉

又三傳卷五

さへ早く遞与せしに。又りや勅使の先觸來らるるに。必定一方の偽者。そ
 長臣の歴々と聚り密に商量あり。淡河彈正定範淡河の進
 出云云。其債案する。真偽と論ぜ。這回の觸が真の勅使
 あり。其由いふ人と論ず。今入來り。比良石中納言とよく
 見らる。最あまのり。美人あり。卿譜とよく聞まらる。昨年二月
 今山川公彦左府と辞し。二條晴良大大臣ふ轉じ。一條の兼冬右大
 臣ふ任じ。近衛大納言晴嗣大大臣ふ任じ。日野資嗣大納言ふ任じ。
 平石治長中納言ふ任じ。書せり。それ比良石の平家ふして。
 花山王氏の末ふ族。大納言とりの極官と守。那勅使の年いま。
 二ハたりの小冠者あり。然と疾中納言と稱する。心得く侍ら

ま。とつふ別所長則朝臣持くる扇とハ。やうち。定範が論究く
 理あり。那の年若弱して。容貌美麗且温順なる。雲の上人と及
 たり。只その人柄の心と附く。そこの隱微とさうさうし
 ハ。失中の失うて。今更ふ云記しなり。那と必偽者かん。誠
 其供奉人と捉つ。糾問せし。仰ふ早く駭兵とつら。摘
 んとせ。處が皆早疾も遁去く。獨登這裡ふ胡迷しと早くも見出
 引捉へ十手め背と打し繩とけり。引ずり來り辛き目
 見せ。責問ハ。那賊今の苦痛ふ堪ふ白状しや。吾ハ即餘
 江濡九郎ふ不し儻し者あ。掾の下舞ハと喚し做しの。先ふ親品濡
 九郎這回勅使の播ふ加へ御下向あると早くし聞し附し攝ふ摩耶山は

又五傳卷之五

奥の院おくのいん。潛ひそくううねね軍學ぐんがく。鍛練くわんれん凝こらら生な巽さ姫ひめ。密ひそにに縛ばくとと告つぐ
 云いやや。君きみののああらら。めめささむむやや。這こ回かい都みやこよりより比ひ良ら石いし中ちゆう納な言ごん治ち
 長あ卿きやうとと人ひと帝てい尊そん於お勅ちゆう詔しやう蒙もうりり。天てん神しん山さんああくく大だい蛇じやのの身みよりより出い
 づづるる壁かべとと受う取とんん。近きん々々播は磨まへへ下げ向けあありり。君きみののああらら。めめささむむやや。壁かべのの
 とと仰おほららせせららるる。端はとと少すくく耳みみふふたためめ。此こゝ由よし知しららせせららるる。伎て倆りやう戎じゆう
 りり。名な玉たまとと得えんんとと思おもひひ。這こ般ぱん不ふ過とくく。時とき節せつああらら。伎て倆りやう戎じゆう
 りり。給たまへへむむやや。とと云いふふ。巽さへへ大だいにに喜よろこびび。そそののああらら。めめささむむやや。閔きん出いせせららるる。
 吾われ濟けい王わうとと望のぞむむ。夏なつ既すでにに年とし月げつ久ひさしし。雖い時とき節せつととああらら。今いま日ひ追お
 へへ。最さい僥がう倖じやうのの更さらふふ。勅ちゆう使しのの歸き京きやう
 一い窺くわいくく。途ちゆう中ちゆう不ふ埋まい伏ふく。拿とんんのの易やすふふ似に。那な方かたのの用もち心こゝろ入いり

よよくく。却かえてて危あやしし。それそれよりより手て短みじふふ。吾われ濟けい自みづか偽いつはり勅ちゆう使し不ふ形かたち作つくれれ。這こ
 とと諸しよ大夫だいふ仕し丁てい雜ざ色しき等らう不ふ出い立たせせ。先ま途ちゆうくく播は磨まへへ下げ向けくく名な玉たまとと
 棄すへへ。ここのの尋よ常じやうのの更さらふふ。你なんぢ是これよりより都みやこ不ふ趣そきき。勅ちゆう使し下げ向けくく
 日ひ限かぎとと礎いとと委い細さい不ふ聽き定さだめめ。其その後のち不ふ束そ帶たい烏くわ帽ぼう子こ。輿う鞋せ籠かご。立た傘かさ
 迄までもも皆みな遺いりり。買かいい求もとめめ。勿な論ろん方かた々々。一ひと名なづづ調しら悟さとららむむやや。
 計かへへ。心こゝろ得えららるる。致いたとと最さい町ちやう寧ねい不ふ指さ圖ずとと加くわへへ懷なららむむ。百ひゃく兩りやうづづとと三さん
 四しとと。金かねとと袴はかま不ふ包かくく。背せ不ふけけああらら。服ふくとと急いそぐぐ。都みやこ不ふ趣そきき
 ききららぬぬ。阿あ裡ち那な裡ちとと聽き合あはあるる。這こ回かいのの勅ちゆう使し。比ひ良ら石いし中ちゆう納な言ごん治ち
 治ち長ちやう卿きやうああらら。文ぶん月げつ七しち日にち不ふ三さん木もく善ぜんのの跡あと積つりりああらら。とと云いふふ。慥たしかにに聽きここええしし

又三傳卷之五

〇五

それより又阿裡那裡とかけ廻り。都く勅使の道具一通買調り
 して益へ入目と憚りて。夜の内小都と出摩耶山の替まで人ふ知
 らざる持入り。緯云と異姫ふ告りてくまば異ひ喜び。それより
 直不口の利くる者と多し。光觸の使とあり。さて真の勅使より。日
 限と四日むりも。早ゆく猛可の下向と偽り異自ら勅使とあり。
 兼江と諸大夫中山貢と称し。其外釣ヶ根権大郎。犬飼碗助。鷹又九
 郎平們と戒へ雑色入仕丁あど。形作せ同勢もつ。十余人當城
 迄來り。そのわたり後ハ此舞ハハ御供廻りの役おぼへ。何事も
 存じいらいと。語と聞て長則朝臣。その異姫と云奴ハ品曾古浪
 みく。その去る日鶴越り。賊の為小掠奪せられ。行方知れずし。

この所ハ
 貞治の
 時中
 十郎
 物語
 長やう
 時節
 少あつ
 所あれ
 も。這
 不因
 遠ん
 傳使
 の來
 解い

閑つら。きと惶べき者あるうかと。感嘆一あがり。那舞ハハ固圀ハハ
 繫せ置直小這十郎と。討手の役ふ命せられり。船と固りて。殿子と
 卒て。搦拿不向ふり。逃ねぬ所トヤ術妻女腕とまへせと罵る。異ち
 呵々と打り。這期不及ん。何とぞ恐まん。徐り。吾素性
 と。知る上りの。包まん。吾済ハ品曾古太平二が。一個嬢の異なり。
 然るも。故有る。太平二主ハ親不似。親ハ非る。蜀魂母ハ衛小世と
 去り。今ハ江湖上ハ憚る。孤獨小等。き言なる。名玉と集
 人為謀。這裡へハ。緯頭ハ是非おとす。只口相つき
 名玉と再盗不拿。夏くも。遺感なり。之ハ十郎大
 ひふ笑。其名玉と奪取。外より入。盜案あり。皆是這方

の謀^{はかり}して那美少年^{なみせうねん}に云^い付^けて棄^{すて}ひ取^とりて、數^{かず}計^{はかり}し。まづ悟^{さと}らすや
と呼^よびければ、巽^{たふさ}ハ大^{おほ}小^こ愕^{おどろ}けし。此^{こゝ}も恐^{おそ}むを刀^{やいば}を引^ひ抜^ひけり。口^{くち}不^ふ呪^{じゆ}文^{ぶん}と
稱^{なづ}ふまは不^ふ測^{そく}や姿^{すがた}ハ抵^た消^{しょう}し。一^{いつ}團^{だん}のけりあり。行^ゆ方^{かた}も知^しれ
どありあり。名^な古^{ふる}十^{じゅう}郎^{らう}大^{おほ}小^こ愕^{おどろ}き吾^{われ}誤^{まち}く油^{あぶら}断^{こと}となす。大^{おほ}切^きの賊^{どく}
と遁^にし。那^な必^{かならず}む當^{あた}館^{かん}於^お坤^{こん}にあり。水^{みづ}通^{とほ}戸^とより。遁^に出^で人^{ひと}とさ
る。元^{もと}來^{きた}那^な裡^{ところ}の其^{その}溝^{みぞ}曲^{まが}りて。枳^あ棘^{じき}を多^{おほ}く植^うえれば。却^{かへ}て出^で早^{はや}
る。吾^{われ}その間^まに水^{みづ}通^{とほ}戸^との外^{そと}へ廻^{まわ}り。埋^{かづ}伏^{ふく}せむ。生^{なま}捉^とり人^{ひと}復^{また}最^もやす
し。者^{もの}共^{ども}統^とけし先^まあり。足^{あし}を早^{はや}め。水^{みづ}通^{とほ}戸^との外^{そと}へ巡^{めぐ}り。窺^{のぞ}へば。
舟^{ふね}の鯉^{こい}鳴^な音^ねと止^とめて。瀟^{しょう}々^{しょう}と。瀟^{しょう}の幽^{ゆう}に閃^{ひら}めり。丑^{うし}三^{さん}時^{とき}あり。やつらと
十^{じゅう}郎^{らう}の髮^{かみ}兵^{へい}の耳^{みみ}口^{くち}と寄^より。私^{ひそ}言^{ごん}示^しして。那^な方^{かた}に忍^{しの}む。其^{その}身^みもやつら

心^{こゝろ}とらえ。口^{くち}に捉^とり引^ひく。ぬき足^{あし}し。傍^{かた}あり。業^{わざ}め繁^{あは}れ忍^{しの}む。
這^{こゝろ}時^{とき}も水^{みづ}通^{とほ}戸^とへ。猛^{まう}可^か洩^はけし。あり。水^{みづ}掘^ほり開^{ひら}け。一個^{いっごう}の
曲^{まが}者^{もの}。口^{くち}に錦^{にしん}の囊^{ふくろ}と唾^{つば}へ。突^つ然^{ぜん}として。頭^{あたま}を出^でし。こゝも是^{こゝ}も是^{こゝ}も
形^{かたち}作^{つく}る。船^{ふね}の熊^{くま}の皮^{かわ}。大^{おほ}袖^{そで}と最^も長^{なが}。着^き下^かし。小^こ手^て臍^{せき}當^あれ。輝^{きら}
昭^あり。云^いふも知^しる。蛟^{せう}倉^{そう}行^{ぎやう}竜^{りゆう}口^{くち}に唾^{つば}へ。錦^{にしん}の囊^{ふくろ}と。左^{ひだり}手^てに迂^うり。右^{みぎ}手^て
小^こ丸^{まる}して。數^{かず}回^{かい}推^お戴^{だい}き。心^{こゝろ}の中^{なか}に獨^{ひとり}り笑^{わら}む。行^ゆ人^{ひと}とまもる。烏^う羽^う玉^{たま}の白^{しろ}
黒^{くろ}も分^わぬ。濃^{のう}雲^{うん}闇^{あん}夜^や。ト。めり。叢^{そう}に船^{ふね}と忍^{しの}む。名^な古^{ふる}十^{じゅう}郎^{らう}行^{ぎやう}
龍^{りゆう}あり。夢^{ゆめ}も知^しる。曲^{まが}者^{もの}行^{ぎやう}ゆ。迹^{あと}後^ごより。錨^{いかり}と捆^く人^{ひと}と牽^ひ度^ど
せば。面^{めん}倒^{たう}あり。行^ゆ龍^{りゆう}ハ臍^{せき}と飛^とり。八^{はち}と投^なげ。行^ゆ人^{ひと}とれ。十^{じゅう}郎^{らう}
忠^{ちゆう}邦^{ぱう}。十^{じゅう}手^て振^ひ上^う向^{むか}へ。廻^{まわ}り。拿^とつ。と。か。を。懸^かく。暫^{しば}く挑^ひく。合^あふ

双玉轉卷之五



河上孤舟救窮婦

河上孤舟救窮婦

おのれを救ふては
おのれを救ふては

河上



くる所へ再び水通戸との音して水桶と蹴放し頭れ出しん。爲
 勅使岳曾古巽。黒髮荆のてし乱れ小具足身と固めしる。花と敷
 く女の曲者長き一刀横へつ。是も同じく熊の皮も。製し衣服に
 袴ののろしむ。金糸の総あがくつ。四下輝く形作あまじり。如
 法闇夜の暗舩れ。蚊倉名古古挑あふ手空と見合し後より。太
 刀抜かきし。斬てかきしへ。行龍得しりし。後へ飛退去んとするを
 巽姫向へ廻つ。亦斬つ。と傍より名古古十郎。十手りし。ハ
 とりけし。人をも手先し行龍が懐へ十手開り。腰みつけし。那
 右玉囊の終ふ地ふ落れん。巽へ早くもささり。寄り。拾拿し去ん
 とまると。遁さし。行龍し。蚊倉行龍刀と抜し。斬てかきし。

雄記の上
 あり雄記
 の玉ふ
 禮問あり

同し渡り合。勝て劣む勇士と勇婦。鋒尖く討合し。行龍が持と
 る大刀の名や。あふ雄龍九の名刀。打振回ふ鋒より。隠々として雲起り。
 巽が眼先遮り。其髪三尺暗き闇夜。白黒り分むあり。巽へ蚊
 倉行龍が。尖き大刀風會釈る。兵兵再兵と痿し。と得しりや
 やし。行龍が。疊うけし。斬つ。と受とんじ。右の乳下。三寸さしり
 斬つ。けら。噫とさしり。氣と執直し。立向んとす。間もあむ。疵口
 よう。光明輝き。轉び出。し。め。の。こ。と。あ。り。其。形。圓。う。て。晃。々。と。明。く
 放ち。四下を照ま。し。正。是。常。闇。の。世。子。天。照。神。の。出。は。せ。し。り。行
 竜も十郎も巽も共。顔見合。せ。是。つ。て。云。間。も。蚊。倉。行。龍。疵。口。より。出
 くる。王。と。手。み。取。あ。は。し。遁。人。と。ま。ると。名。古。古。十。郎。後。より。討。て。鬼。と。雄

又玉轉巻之五

龍九あり切拂ひ鉾より隠ると。霞鍵起り黒雲入船と踊らしり
 ひらりと飛乗り。行衛り知しむありあり。此時しも十郎の
 行龍既ふ遁去りて。巽と捉人と討てかくる。豫けり恐る人傍
 なる業より。浦上大學頭れ出く。呼兵の笛を吹くも。駈兵の大集
 むりく。集り來り皆手ふ掌子。十手と振或ハ又明杞あんと
 かり照らし。只一個の巽姫と。十重并重子取圓く。然れも巽ハ
 些しも恐る手。囊の儘名玉ハ口ハ唾く。近寄駈兵と。八方へ投飛
 し。勇威と震る。挑む戦ひ元より望まぬ。闘あれば手空と見え
 遁人とされど。些しも手空なれ。多勢カハ一個圓圖あがり次第に
 美囊の川辺ふ出く。這時しも巽姫ハ精意勇ます。加と

一方を討破り。近付者と切倒し。河端走り出く。揚柳ふ繫し
 扁舟ハ身と踊らしてひらりと乗べ。都合ハ船の纜切さし。早き
 美囊川の中流ふく。浦上大學指圖となし。蜚器り討
 と。拿れり百人計り。射手ふ傘。散々射立く。巽ハ口ハ玉と唾
 へたの手ふて。搦と推立右手ハ刀と打振て。蝗の如く飛來る箭と。
 秘術と盡し。うけ流せむ。甲夜より。の熱ふ身に。芳まし。そが
 上ふ嚮ふ行龍ふ斬る。乳の下ハ疵大に痛く。今ハ倒れし女
 の防ぐべし。あしむ。心の中ハ嘆息し。這里ハ死る。浅
 間し。や。と思へ。いよ。身ハ。芳れ。決さ。む。鷄鳴時。秋の夜ハ
 ま。長。く。早。あ。め。と。明。渡。修。羅。の。中。ハ。巽。姫。ハ。白。と

見らば一彪の勢。其程九十人たり。必死に成り。群るる野兵の中へ切
入る。命限り血戦し。巽さふと救へて。這里と詮度見戦ふなり。
畢竟は何者なり。そもく巽と救ひ得るや。引續て説人と思へ
し。紙數既し定限あり。第一集は是首なり。止り第二集十一回
首より。又編と次巻と改奇々妙々と説出さん。暫時休あり
て。看官待し給らんあね。腕とさすり。握り拳汗と干拿
て。第二集の出板と待せし。

自註として。この巻中三敵闇夜に戦ふ。名玉山現付
といふ有像玉光と放る空に樓閣と為せし。是文中
更急卒の時として委し。其様と述ふことまなり。爰

の暫く言ひて。画ふゆつて其形をきし。是謂所画中の支
中の画して。作者の筆と補し。画工の一切と云つて
又又ら。此書の始より説出せし。如く播磨一揆の傳記家
の實跡と演人と思へど。やもすれば更と委し。説人とするが
まゝ。その佳境に至る。看官這意と察して。追々出る續編
と侍し。傳記の更實と知り給ふべし。
較倉行竜異姫の二名。天
井上。一揆の魁主となる。

母傳

切取

女訓

女前訓 美種

全一冊

鳥濱菴先生述

鳴濱菴先生、心算といふことありて、
 七女より十二女までの内、小女一由、
 後男姑父母夫小仕、孝貞の通次、
 賢素節儉と守を操と正しく、
 昔より名をいへり、賢女節婦の傳と
 婚式の式化法子と書つる事、
 男女相性名頭字は、
 又、
 教ヶ宗も鳴先生ふりく、
 教ヶ宗も鳴先生ふりく、

善いものづくは入るしを中支らふ中もかたもかたも
 人字小志くせんんはさく婦女の所別し海内七賢
 此書細推しう一代の代に投さるしして漢書の日ハ作
 雲々バく婦徳と備ふる大いし有益の書なり

心學子五則

全書冊 録田村弘先生作

人倫の正法といふは持敬積仁知今世知長者の五則
 一は孝も學ばざれば孝は成らずと云ふは孝と云ふは
 人におもひたるまじ平かともく和祥見重し時より善とす
 仁義の道に如き自ら質素節儉し懐い五身おとすこと
 貴海といふこと世上を比の善なり

釋尊御一代記圖會

全部六冊

浪谷 山田意齋叟參考
前北齋老人圖画

釋迦如來の御父淨飯大王の御即位と發端と
 如來摩耶夫人の胎内小生と託事憍曇彌夫人摩耶と娠胎内乃
 王子の出生及妨んと道師小呪咀せむる條如來夢中乃說法小母の十思
 と鏡の更淨飯王藍毘尼園小花の宴と催しを悉達太子誕生の奇瑞
 悉達太子御幼推しり菩提心と發しを謂釈迦提婆遺恨の死悉達太
 子宮中と出て檀特雪山小難行しを正覺成道とて出山衆生と濟度
 あり更迦葉舍利弗目蓮及諸羅漢佛弟と成和解耶愉陀羅女真心
 提婆が十惡須達月蓋而長者の信心流離王の異惡釈尊御入滅五妙
 神力涅槃像の如も都て如來御一代の事と記圖とが難有續水也

